

OMU Students 海外留学レポート

Study Abroad Report from the OMU students

「トビタテ！留学 JAPAN」とは：

文部科学省が展開する官民協働の留学促進キャンペーンで、採用者には返済不要の留学奨学金が支給されます。

(参考)【文部科学省】トビタテ！留学 JAPAN <https://tobitate.mext.go.jp/>



プロフィール (Profile)

氏名 O.K.
所属 大阪公立大学大学院
現代システム科学研究科
現代システム科学専攻
社会福祉学分野

学年 博士前期課程 1 年

留学先 ELS Language Centers
Camphill Village Kimberton Hills

留学期間 2023/1/2~2023/3/30

留学レポート Study Abroad Report

【渡航前】

高校生の頃から「大学生になったら留学がしたい。外の世界を知りたい。」とずっと思っていた。地元の香川大学に入学して合気道部に入部したときに、「体育会系の部活動を 3 年間続けて幹部の主将も担った後で、大学 4 年生の時期に 1 年休学してオーストラリア留学。帰国後はこれらの経験を活かしてすぐに就活終了。」とカッコいいの塊のような先輩と出会い、その人をロールモデルにしようと決めた。ただ自費留学する金銭的余裕がなかったため、給付型奨学金制度「トビタテ！留学 JAPAN」に応募。奇跡的に合格することができ、4 年生から 1 年間の留学を行う予定が、コロナウイルスによって渡航延期となった。

大学を休学し、今後の進路について考えた。就職も視野に入れたが、どうしても「学生のうちに」留学したい思いが拭えなかった。この休学期間中にアルバイト先の社会人や、就活で出会った人事の方々、以前からお世話になっていた社会人など、あらゆる大人に「22 歳に戻って一年間暇だったら何をしますか」と質問してみた。すると皆の答えは「もっと勉強しておけばよかった」「いろんな国や地域に旅行に行きたかった」の 2 つのどちらかだった。そこで私は、「目的を持った留学は絶対に意味がある。」「学ぶことはやっぱり大切なんだ」と再認識し、大学院進学を決めた。

進学先は大阪公立大学大学院の社会福祉学分野を受験した。理由は留学計画の軸である「障害」について専門的に学びながら研究したいと思ったからである。大学院の講義と並行して受け入れ先に連絡をするものの、返信を頂けなかったため、国を変えて別の組織に連絡をしたところ、すぐに返信を頂くことができた。そしてインタビューなどを経て、年明けの 1 月から 3 月末までの 3 か月間受け入れてもらえることになった。



【渡航中】

英語に慣れるためにフィラデルフィアにあるセントジョセフ大学に併設された ELS に 2 週間通った。正直、英語力が向上したとは思わないが、この期間にフリーに滞在してアメリカ文化を感じることができた。また海外を一人で行動したり、知らない人に声をかけることが多く、胆力がついたように思う。

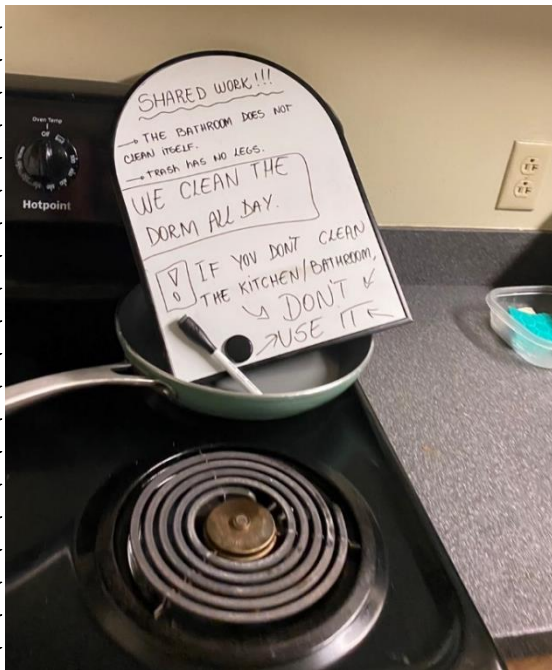


3 週目からはこの留学の軸である Camphill Kimberton Hills という障害を持った人と持っていない人含めた計 100 名ほどの村に滞在していた。そこはドイツ、イギリス、ペルー、コロンビア、アジア圏など様々な国からボランティアが集まって共同生活をしている。キャンプヒルでは障害を持った人と、ボランティアのケア関係を観察しつつ、25 名の方々にインタビューをすることができた。「どうしてキャンプヒルで生活しているのか」「障害を持った人をケアするのは「仕事としてか」それとも「生活の一部なのか」といった質問をしてみんなの意見を聞くことができた。自然に囲まれ能力主義社会から離れた小さな村での生活は、どの国に行っても経験できない「キャンプヒルの文化」を全身に感じる事ができた。



【大変だったこと】～精神面～

- ・留学延期を言い渡された大学 4 年生の時。当時思い描いていたライフスケジュールが一気に崩れた気がした。
- ・同期が働いて自分でお金を稼いでいるのに、私は何をしているのだろうと悲しくなった。
- ・モラトリアムの延長として留学や大学院進学をしていると捉えられるのが嫌で、ずっと気を張っていた(今も)。



●言葉が通じない環境で、自分はマイノリティなのだとして強く感じた。

●語学学校に通っていた、たった 2 週間だが、寮のルームメイト 2 人と折り合いが悪く、しんどかった。二人はブラジル人で、常にポルトガル語を話していた。ある日、夜の 9 時に帰ってくるとキッチンに「部屋を掃除しないなら使わないで」と書かれたホワイトボードが立てかけられていた(私は食後に食器をすぐに洗うし、ゴミは自分の部屋のごみ箱に捨てていた)。夜中まで大きな声で談笑したり、お酒を飲んで動画配信アプリに投稿したりと騒がしかったため、別の階の共有ルームで勉強して、二人が寝たであろう時間に自室に戻るようしていた。2 人は、私が使わないような道具(電光装飾やぬいぐるみ、キャンドルなど)も含めて数百ドルの買い物をしてきたときに、それを割り勘してくれと言ってきた。あまりに高すぎたので求められた額の半分に値切ってもらった。私

も洗濯洗剤やフライパン、一部の食材は使うと思ったから半額は支払った。しかしその時に買った食材だけを使っていたのに、それは私たちのものだと、全て棚の中に隠された。以上のようなことが出会って 1 週間内で勃発し、2 週間目はこの人たちと生活できないと精神的に参ってしまい、語学学校の先生に相談をしていた。

～事務手続き面～

・当初はアイルランドにワーキングホリデービザでいく予定だった。大使館にビザ取得のために必要書類とパスポートを届けていたのだが、パンデミックの間ずっとパスポートが帰ってこずビザもいつ降りるのか分からず、宙ぶらりんの状態だった(のちにこちらから連絡してパスポートを返してもらった)。

・トビタテの計画変更届を書くこと

●アメリカのキャンプヒルへの滞在が決まってから、「無犯罪証明書」の提出を求められた。日本でこの証明書を作るにはいくつかの条件があり、私の場合はその条件のどれにも当てはまらなかった。様々な方法を検討したがいずれも難しく、最終的にキャンプヒルの側に譲歩してもらうように交渉した。その際に、日本とアメリカの文化の違い、制度の違い、私の現状(行政に掛け合ったがたらい回しにされていること)、私が学生で身元も問題ない点、教授3人の英語の推薦状等を記載したパワーポイントを作成した。すべて英語で書きイメージしやすい様にイラストも含めた。このほかにも私は3年前からキャンプヒルに行きたかったのだという思いをWordに記して送ったりした。キャンプヒルからは日本とアメリカの文化の違いを理解してもらい、今回は特例という形で滞在許可を頂くことができた。

【楽しかったこと】

・現地の合気道道場を探して、2つの道場にお邪魔することができた。語学学校には2週間の滞在だったため、その短期間の間に3回ほど稽古をつけていただいた。そこで出会った人たちが皆やさしい方で、土曜日の昼にお邪魔したときはお昼ご飯に誘ってもらい、現地の先生を含めて6名ほどで食事に行ったりした。平日の夜に稽古に行ったときは、帰りが暗いからと寮まで送り届けてくれた。



・フィラデルフィアやNYを一人で歩きまわった。特にNYに1人で行って帰ってこれたのは奇跡だったように思う。暗くなるのが早かったのとスマホの充電がなくなりかけていたので、予定を早めてフリーに帰ろうとバス停に行き、バスの変更交渉をしたり、フリーについては寮に戻るためのバスが一向に来ず隣でバスを待っていた黒人のおじさんに相談して、途中で同じバスに乗って会話をしていた。なお、おじさんが降車した後、そのバスがあきらかに寮から離れていく様子だったため運転手さんに抗議していたら、「お前が向かう方向のバス停まで送ってやる」と言わ

れて真っ暗闇の橋の下におろされ、トイレを我慢しながら30分くらいバスを待ったりした。他にもある日、フィラデルフィアを歩いていて、全く地図が読めず近くの人に道を尋ねたり、バスに乗るもどこで降りればいいのか分からず、降車した場所があんまり治安が良くなさそうな場所で、たまたま近くを歩いていたおばさんに相談して、途中で一緒に歩いてもらったりした。両都市は決して治安がいいとは言えず(ときどき薬をしている人がいたり、ホームレスの方がいたり、地下鉄などはネズミが普通にいたり等)、少々恐ろしかったが、たまたま優しい人に恵まれて、一人でも観光を楽しむことができた。

